

—日本熱帯医学会60周年と将来に向けて—

日本熱帯医学会理事長 狩野繁之

第60回日本熱帯医学会大会が、「一步先への熱帯医学:フィールド、ベンチ、イン・シリコ One Step Ahead in Tropical Medicine: Field, Bench, In-Silico」というテーマを掲げ、2019年11月8日～10日に山城哲大会長(琉球大学大学院医学研究科細菌学講座・教授)の周到な準備のもと、大盛會に開催されました。熱帯医学の学際性を強調されたテーマを、日本唯一の亜熱帯地域の沖縄県で開催する意義を、まさに体温として感じました。思いだせば、第50回の記念大会も、沖縄の同じ会場(沖縄コンベンションセンター)で開催されましたが、すでに10年の星霜が経ったかと感慨深く思います。この記念すべき2回の大会を通して、日本の熱帯医学の方途が明確に示されたと思われます。第70回大会も、是非また沖縄で開催して欲しいものです。

2020年3月19日に、国立国際医療研究センター研究所(東京)で開催されました定時理事会・評議員会(社員総会)で、一般社団法人日本熱帯医学会の事業年度の変更を伴う定款の改定が認められました。これにより、本学会の会計年度も10月1日～翌年の9月30日までとなります。11月1日から大阪大学で開催が予定されています第61回日本熱帯医学会大会(大会長:大阪市立大学、金子明教授)は、グローバルヘルス合同大会2020の中での学術集會として開催されますが、會期中に、新年度の社員総会を開催し、本年度の会計報告、事業報告などをさせていただきます。そしてこの時まで、理事の改選を行い、総会では新しい理事長が承認される予定です(私の理事長の任期は、法人化前から足掛け6年となり、満了となります)。

さて現在、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の日本国内および世界での流行拡散により、COVID-19の制圧に向けた診断技術、創薬、ワクチンの開発が急がれています。これから主に熱帯地を中心とする開発途上国への拡散が懸念される季節に突入し、COVID-19医療サービスのUHC(Universal Health Coverage)の達成が、私たちの研究フィールドにおいて喫緊の課題となります。一方、エイズ・結核・マラリア、NTDsの研究体制や対策支援がトレード・オフされるような状況が生まれてきております。私たち日本熱帯学会の会員は、それぞれの専門性において、バランス感覚よく世界の健康・医療の促進に関するエビデンスの構築を行い、政策提言への関与も積極的に行ってゆかねばならないでしょう。

そして、いわゆるポストコロナの時代は、科学を重視した新たな秩序づくりに向かうと思われまふ。世界の誰一人も取り残されない新たなグローバル化の模索を行いながら、本学会会員の皆様が、熱帯医学の今日および将来の使命を、十全に果たされることを希望します。

(2020年4月1日更新)